
勇者→魔王＝＼（＾o＾）／

夢想曲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者↓魔王Ⅱ＼（＾Ｏ＾）／

【Nコード】

N3725Y

【作者名】

夢想曲

【あらすじ】

魔王が突然世界征服するとかいう面倒くさい事を言い始めたので、人々は困り果てていた。それを解決するために（面倒事押し付けるために）勇者召喚をする事になったが――――勇者の性格が魔王でした。■タイトルの読み方は【勇者が魔王すぎて世界がヤバイ】。略して【ゆまばい】！！ 某所より転載。

L v . 0 a

魔王とかいそうなそれっぽい城。

その中にあるそれっぽい会議室のようなところでそれっぽい奴らが集まり、それっぽい事を話していた。

「いや、だから僕はこう思うんだよ。最近僕達は人間に舐められる、ってね。昔は魔王Ⅱ恐怖の対象的な感じで恐れられてたけど、今は『はっ、そんなレベル上げて物理で殴れば余裕で死ぬしk s w w w w』みたいに思われてるんだよね。それは流石に魔王である僕や、七大悪魔である君達もちよっと表でろやゴラとか思わないかい?」

と、文にするとひたすら長く、読むのが面倒な台詞をつらつらと述べたのは、文字通り魔王であるルーシャⅡリユツイフェールであった。

魔王というとDrクエとかのひたすらゴツイおっさんを思い浮かべるのが普通であろうが、彼はそんなイメージとは程遠い、むしろ逆の爽やかな好青年という印象がする。

しかし、それは見た目だけで、実際は文字通り何もかも魔王である。

「だから僕は決めたんだよね」

魔王ルーシャは、それっぽい椅子から立ち上がり、窓のそばまでふらふらと歩き、紅く染まった月を見ながらニヤリと笑った。

「――魔王の威厳というのを平和ボケした馬鹿共に味あわせるために、僕は世界征服をさせてもらおうよ」

魔王の瞳が、月の色よりも赤く、紅く、赫く染まる。

L v . 0 b

「ウェストと戦争中だというのに世界征服宣言とかマジ勘弁してくれよう………DQN魔王エ……」

そう呟いたのは、東の国、イストの国王だった。

——この世界、【ディヴェルティメント】には、東の国のイスト、西の国のウェスト、南の国のミディ、北の国のノーフの4つの国が存在している。

東、南、北の三国は王が統制しているのだが、西だけは軍事国家であり、西は主に銃や毒薬などの近代的な武器を用いるが、他の三国は魔法を主としている。

簡単にこの四カ国を説明すると、東と西は権力は大きいが仲が悪く、昔から戦争ばかりしている。南は中立的な立場であるが、さほど力は強くない。北は他国との関わりを殆ど遮断している、という感じである。

「マジでどうする？多分今この状況じゃ世界征服防げないと思うんだけど」

大分自由な国王がそう言うと、大臣の1人が

「それなら、勇者を召喚しません？それっぽいですし、その方が面倒じゃないかと」

と、国王と同じような感じを醸し出しながら言った。

「確かに、勇者召喚いいな。かつこいいし。……でも、召喚士とか居

たっけこの城内に」

そう国王が言うと、さっきとは別の大臣が手をあげて、

「一応それっぽい事なら出来ますよ。まあ、どんな勇者が来るのかは分からないですけど」

と言った。

国王は少し不安だったが、召喚士を探すのも面倒だったために、それでいいかと思う事にした。

大臣が魔術書を片手に持ち、もう片方の手を伸ばして詠唱をし始めた。

足元には紫色の魔方陣が淡く光り、どこか神秘的な感じがする。

国王は意外な大臣の一面に驚きつつも、その様子をじつくりと見守っていた。

「————、出でよ!!」

大臣がそう言うと、部屋全体が突然白く光った。

「!!」

国王は思わず目を瞑ってしまったが、すぐに目をなんとか開けた。徐々に光は消えていき、魔方陣の中央には————

「…………え？」

そこには、勇者どころか、何も現れていなかった。

「おい貴様なに行数の無駄遣いしてんだよゴルァ」
「いや、別に無駄じゃないです、無駄じゃないですって!! 一応その、召喚は成功してますってえええ!!!!」

「いねーじゃねえかよks! どころが成功だこの塵野郎が!!」
以降、醜い大人の言い争いをお楽しみください。

「塵野郎でwwww少なくとも国王が言う台詞じゃないですってwwww」

「話そらすんじゃねえよ!! どこいったんだよ勇者はよオオオオ!!」

「た、多分召喚は出来てますけど、出来てますけどって痛い痛い首締まってますってッ」

「言えたら話すからさっさと言え!!」

そう国王が言うと、大臣は露骨に目をそらしてボソリとつぶやいた。

「…多分、成功はしましたがその、この世界のどこかに飛びました」

「…………へ？」

「いや、多分ここじゃなくて何処かに飛ばされています」

「…H A ? ?」

素直に召喚士を呼べば良かったと心底後悔した国王であった。

L v . 0 c

フォンシエ・コンテステイは、ごく普通の狩人だ。

イストの小さな村に住み、近くの森で鹿などを狩ったり、作物を育てたりなどといった平和的な暮らしをしていた。

…ま、そういう前置きからしてもう日常は崩れ去るんだろうな可哀想にとか思ってる人は正解である。

フォンシエはいつも通り森に行って鹿を狩ろうとした時に、突然森が眩しく光った。

慌てて森に駆け寄ると、そこには――

「……………誰？」

切株に寄りかかり、すやすやと寝息を立てている青年がそこにいた。銀髪の青年は美青年と言っているほど顔立ちが整っている。フォン

シエは同性にも関わらず一瞬ドキッとしてしまった。

——絵に描いたような美青年って本当にいるんだなあ。

フォンシエは少しその容姿を羨ましがりながら、恐る恐る近づいてみた。

「おーい、起きてるー?」

寝ているから起きている訳などないのだが、とりあえずそう言ってみた。が、やはり返事は無い。

思わずまじまじとフォンシエは青年の顔を見つめながら、村では見かけない顔だなとか、どうしてこの青年はこんなところで寝ているんだろうとか、そういえばあの光何だったんだろうなどと思った。

「ま、悩んでも仕方ない気もするんだけどな」

そういいながらフォンシエは自分の髪の毛をくるくると弄っていると、青年がゆっくりと目を覚ました。

「…ん、あれ…………?」

凜と透きとおった声がフォンシエの耳に響く。

フォンシエは慌てて青年の方に顔をやると、青年はあたりをキョロキョロと見まわしていた。

「ここ、何処だ…………?」

青年は困ったような顔をする。

とりあえず何か話しかけないとな、と思ったフォンシエは、少し悩んでから口を開けた。

「やあ、初めまして…だよね。その、君は?」

言った直後にフォンシエはもっと気のきいた言葉を言えばよかった
なと一瞬後悔したが、青年は嫌そうな顔をしながらも、すぐに「
ギルベルト・H・アイヒベルガー」と呟いた。

——ギルベルト・H・アイヒベルガー、か。随分かつこいいとい
うかゴツいとか何とも言えないような名前だな……。というか、
さっきのあの顔は一体…？

フォンシエは思わずそう思ったが、首をぶんぶん横に振って、自
分も自己紹介しようと思った。

「俺はフォンシエ。フォンシエ・コンテストイ。この森の近くの村
に住んでいて、狩人をしているんだ」

フォンシエはそう言うと、青年——ギルベルトは「あっそ」と可
愛げのない返事をした。

——口を開くと生意気な奴、ってところか。まあ、俺より年下み
たいだし、気にしないでおくか。

そう思った直後、その言葉を速攻で前言撤回したくなるような台詞
をギルベルトは吐いた。

「んまあ、よく分からねえけどいいや。——おいお前。フォなん
たら。：名前めんどいから下僕。さっさとこの俺様に上質なベッド
を用意しろ。というか村とかなんかショボいし都会とかのがいいな」

「……………は？」

残念な勇者の物語は、こうして幕を開けた。

――――勇者が魔王すぎて世界がヤバイ！！

Lv. 1 決意「旅の始まりは冒険の始まり」

狩人である青年——フォンシエ・コンテストイは、とある事件（プロローグc参照）により、異世界から来たギルベルト・H・アイヒベルガーと出会い、下僕と呼ばれるようになった。

フォンシエはとりあえず自分の家に連れていく事にしたのだが、さつきからギルベルトが五月蠅い。

「なんだよお前田舎くせえな」とか「うわマジ田舎なんかよこそうわーほんとにもううわー」とかぶつぶつ呟いている。正直フォンシエは殴りたかった。

ちなみに、一番うぜえと思った言葉は「ちょ、弓とかださwww」である。

——なんとか家の前に到着。

「はあ、疲れた……。帰るだけなのにこの疲労感は何なんだ……」

そうフォンシエがため息交じりに呟くと、隣にいる魔王様は超絶不機嫌オーラを放ちながら地面をガシガシと蹴り、

「おい下僕。何なんだこの塵屋敷は。俺様は宮殿並みの超豪邸の高級ベッドで寝てーんだよks!！」

と怒鳴った。

「人の家をks呼ばわりすんなよ!……というか、そんな事言うんだったら勝手に野宿でもしてやがれ!」

対してフォンシエがそう言い放つ。

「のじゅッ……! チッ、しょうがねえ。我慢して下民の家にいてやるとするか……」

ギルベルトは諦めた顔になって家にズカズカとあがりこむ。

フォンシエは頭をがち割りたかったが、なんとか堪えて自分も家にはいった。



「———んで、どうしてこの世界に来たんだ？」

フォンシエは2人分の紅茶を淹れながら、ギルベルトにそう尋ねた。部屋にはアールグレイのほのかな香りがゆったりと漂い、イライラしていたフォンシエの気持ちは段々とやわらいでいった。

「んなん、こっちが聞きてーぐらいだつーの。突然俺の視界が真っ白になって、気がつけばあんな森で寝てたんだからよ」

「———ったく、どうやったら元の世界に戻るんだか……」

そう思いながら、ギルベルトは気だるそうに答えた。

「なるほど。……しかし、なんでこんなところに飛ばされたんだろうな。よりによって」

「それはこっちが聞きたいぐらいだつーの!!……あ、うめえ」

「はは、それは淹れた甲斐があったってもんだ」

フォンシエはにこにこ笑った。

その瞬間、ギルベルトは即座に「別に下僕を褒めてるわけじゃねーよ!」と言ったが、フォンシエはなんだか微笑ましくなったので余計に笑ってしまった。

「———少しは可愛げがあるんだな。一応は。」

そう思いながら、フォンシエは本題に戻る事にした。

「しかし。どうする？こんなところに居ても解決はしないだろうし……」

「早く都会の豪邸の以下略したいしな」

ギルベルトの必殺ドヤ顔攻撃。フォンシエの苛立ち度は5あがった！

「…それは置いといて。まあ、一番は情報収集なんだろうけど、こんな田舎には情報通の奴なんてそうそういないし」

「それならお前が集めて来い。都会まで行ってな」

「なんで俺なんだよ！！——あ、その手があったか」

フォンシエはそう言って立ち上がると、何かを探し始めた。

「ん、何やってんだよ」

ギルベルトがそう尋ねると、フォンシエは地図を手にながら

「旅して情報を集めればいいじゃないか。お前が此処に来た理由も分かるだろうし、なんせ俺も一度は旅してみたかったんだ。なかなか名案じゃないか？」

と言った。

ギルベルトは少し悩んでから、まあ、それはそれで楽しいかと思い、承諾をした。

こうして、二人は旅をすることになり、明日に備えて早めに寝る事にした。

これから様々な出来事が起こる事を知らずに――――

L v. 2 疑問「フォンシエって…」

翌朝。

小鳥の声がうんぬんとかいうよくある描写は割愛。

残念魔王系異世界人ことギルベルト・H・アイヒベルガーは、くしゃくしゃと頭を掻きながら、ゆらゆらとした覚束ない足取りで椅子の前まで行き、どさりと座り込んだ。

ゆらりとアールグレイの香りがギルベルトの鼻をくすぐる。

昨日とは違う匂いだなと思いつながら、紅茶を注いでいる狩人に話しかけた。

「これって何茶？」

まだ寝ぼけた声のギルベルトとは対照的に、フォンシエははきはきとした声で「レモンティーだよ」と答えた。

その表情は、新しい物を見る少年のようにキラキラと輝いており、恐らく旅の始まりにそわそわしているのだろう。

「…お前、子供かよ」

思わずギルベルトがそうツツこむと、フォンシエは苦笑いした。

「ははは、確かにそうかもな。——でも、夢だったんだよな。こういう風に旅立つって事がさ」

「…あっそ」

ギルベルトは、なんとなくフォンシエの顔が見れなくなって、少し目をそらした。

——ん？

そういえば、昨日からずっと疑問に思っていたことがあったのを思い出した。

「おい下僕」

「また下僕かよ。…まあいいや、何だ？」

フォンシエがそう言って少し首を傾げると、ギルベルトはぼそりと呟いた。

「お前、その耳————なんなんだ？」

そうギルベルトが言った瞬間、フォンシエの耳———先のとがった長い耳がピクリと動いた。

「ああ、この耳のことか。…いつ質問されるのかなとは思っていたけど」

フォンシエは苦笑すると、自分の耳をいじった。

「俺の耳は、見ての通りエルフ耳なんだよ。この世界では低確率でこの耳の人間が生まれるんだ」

「へえ……。って、たしかエルフって妖精とかじゃなかったっけ」

「いや、そうじゃない。れっきとした人間さ。ただ、普通の人間よりも五感とかが鋭かったりするんだけどね」

そう言うと、ギルベルトは羨ましそうに耳を見つめた。

「なんかすげーな、それ」

「ははは。…でも、本当にランダムなんだよ。普通の人間と人間から生まれることもあるし、両方がエルフ耳の人間でも生まれない事もある。ま、これは神様からの贈り物ってヤツさ」

自慢げに語るフォンシエ。

ただ、その瞳は少しだけ寂しそうに揺らいでいた。

「じゃあさ、デメリットとかって——」

そうギルベルトは言いかけたが、フォンシエの表情を見て、思わず言葉をひっこませた。

「——ああ、あるよ。…この耳の人間をよく思わない人間もいてさ。お前らなんか人間じゃない、さっさとこの世から消えてしまえとか言つて。…そいつらがエルフ耳の人間を虐殺するという話もよく聞くんだ」

「……………」

部屋中に暗く乾いたオーラが広がる。

それに気付いたフォンシエは、なんとか変えようとしてこり笑った。
「まあ、エルフ耳の人間が様々な便利な道具を作って世界から評価されてるといふ話もあるから、必ずしも全員に嫌われてる訳じゃないよ」

それを聞いて少し安心したギルベルトは、ふうとため息をついた。

「ま、旅の途中でそいつら見つけたらやつつければいいーしな」

「お、たまにはいい事言うじゃないか」

「そうすりゃ名が広まって新世界の神に——」

「そう言つた俺が馬鹿だったよ…」

フォンシエは呆れながら言うと、ギルベルトはニカッと笑っていった。

「飯！！腹減ったさっさと作れ！！」

「へいへい、分かりましたよーっと」

昨日よりも騒がしい朝食に戸惑いながらも、フォンシエは少し嬉しくなっていた。

Lv. 3 武器「えー、マジっすかー……」

「まずい！もう一杯！！」

「青汁じゃねえんだから……」

そう言いながらも、フォンシエはギルベルトにおかわりのパンを出してやる。

フォンシエはコーンスープにちぎったパンをつけ、幸せそうに頬張っていた。

「うめー！間違えた糞不味い！！コーンスープ糞不味い！！」

「なんか褒められてるんだが貶されてるんだか分からないんだが……」
「貶してるに決まってんだろこのGEBOKU！！」

「……へいへい。溢さずに食べてくださいねご主人様っと」

ギルベルトの口の周りについているコーンスープをジト目で見ながら、フォンシエは自分の使った食器を洗っていた。

———そういや、旅に出ればもうこいつらを使うのはしばらくは無
いんだよな……

気に入っていた柄の皿を見ながら、フォンシエはしみじみとそう思
った。

と、そんなフォンシエをガン無視するかのように、ギルベルトは食
べながら喋った。

「そういや、武器とかまら決まってねえよな。俺様の。やつふあり
異世界から来た奴Ⅱ剣だよぬあつ」

「どんな方程式だよ。……でも、俺弓使いだから剣とかあんまいモ
ンねーぞ」

行儀の悪さに半ばあきれながらも、フォンシエはそう応える。

「むあ、RPG的には序盤だから別にシヨボいのもかまふあぬえーけろっ」

「…本当にシヨボくてもいいなら無くは無い、けど」

そう狩人が言ったのと同時に、我が儘異世界人は口の中に含んでいたパンを飲み込んだ。

「え、マジで？」

ギルベルトが意外そうな顔でフォンシエを見ると、フォンシエはため息をついた。

「嘘言ってもしょうがないからな。——でも、見たところで文句言わないでくれよ？」

「それは見ないとわかんねーよ」

「まあ、そりゃそうなんだけど…。とりあえず引っ張り出してくるよ。その間に使い終わった食器をキッチンまで運んでくれな」却下」

「…………」

やれやれ、と心の中で呟きながら、フォンシエは物置に向かった。

「——なあ、ちょっと待ってくれ」

ギルベルトは嫌そうな顔をしながら早口で言った。

フォンシエはやっぱりか…? と思いながらも、持ってきた武器をちらりと見る。

「これってさ、その、武器？」

「一応形はそれだし、多分武器」

「…戦えんのか？」

「…………多分」

「こんな装備で街うろろうしてたら確実に変人扱いされると思うん

だが」

「その時は新しい武器を買えば――」 「それまでが恥なんだよ！
！この腐れ下僕！！」

ギルベルトはそう言い放つと、一応自分の武器であるモノを地面に
思い切り投げ捨てた。

ぎるべると・H・あいひべるがー
ぶき ぼくとう

「…木刀だって一応武器として成り立ってるんだよ！！RPGの主
人公だってこれ初期に装備してんの！！分かれ！！」

「わかりたくねーよ！！何で木刀なんだよチキショー！！！！」

2人は暫く木刀についての言い争いをしていたのであった――。

「…あ、結局木刀持っていくんだ」

「絶対にすぐにフツの武器に変えてやるんだからなああああ！！」

Lv. 4 油断「愛玩動物恐るべし」

「――さて、準備も済んだところだし、そろそろ出発しようか」

愛用の弓を持った狩人――フォンシエが、木刀を持った異世界人――ギルベルトにそう言った。

ギルベルトは気だるそうな顔をしながらも、のんびりと首を縦に振った。

やっと、この二人の冒険が始まることとなった。



「そういや、さっきから気になってた事があるんだけどよー」

ギルベルトは木刀をいじりながらフォンシエにそう問いかけた。

フォンシエはちらりとギルベルトの方を見ると、ギルベルトは自分の頭を掻きながら口を開けた。

「戦い方と違ってどうやるんだ？」

「あー………」

もってもらしい質問をされて、フォンシエはそういや言ってなかったなと心の中で呟いた。

「実際戦ってみれば一番分かるんだけど、村から出ないといけない

からな―」

「え、なんでだよ」

ギルベルトは首をかしげると、フォンシエは薄く笑った。

「えっとな。：こういう村とか町とかには、モンスターがはいれないように結界がはってあるんだ。そうじゃないと安心して眠れないしな」

「へー。：じゃあ、こういう所に来れば安心なんだな」

「いや、そういう訳じゃない。たまに結界が一瞬薄くなる時があって、その時にたまたまモンスターがはいりこむ、って事もあるんだ」

――そうフォンシエが言った瞬間、突然民家の近くからガタツという物音がした。

ギルベルトは何かが落ちたりしたんだろうな、と呑気に思っていたが、フォンシエは突然笑顔を消した。

「ん、どうしたんだよ下僕」

ギルベルトがそう言うと、フォンシエは自分の人差し指を軽く唇にあてた。

「しっ、静かに。――どうやら丁度いいタイミングでモンスターが村にはいりこんだみたいだ」

「マジかよッ。：てか、よく分かったな」

「前にも言ったろ。エルフ耳の人間は五感が鋭いつて。：そうだ、丁度いい。討伐ついでにお前に戦い方について教えてやるよ」

そう言うと、フォンシエは軽くウインクした。

「：めんどくせ。でもしやーねえ、戦えねーとこの先めんどくせえもんな」

そう言うと、ギルベルトは自分の剣――とはいっても木刀だが――を構えた。

「んで、どうすりゃいいんだ下僕」

「そうだな…。多分向こうはこっちに気付いてないみたいだから、挟み撃ちにしよう。お前は正面から民家の方に向かってくれ。俺は背後に回る」

「なんか、お前に命令されるのは癪に障るが…。まあ、今回は特別だっ」

そう言った途端、ギルベルトは民家の方へダッシュした。

「俺も速くいかねーとなっ」

そう言うと、フォンシエは民家の背後へと回った。

「——こいつ、本当にモンスターなのか？」

ギルベルトは目の前にいる——どう見ても愛玩動物ウサギにしか見えな
いモノを睨みつけた。

そのウサギのような何かは普通のウサギとは違い、毛が紅い。
だが、その顔を見ていると、木刀を握っている自分が悪者のような
気がしてきて、ギルベルトは複雑な気分だった。

とりあえず、試しに恐る恐る近づいてみることにした。

——もしかしたら、捕まえたら高値で売れるんじゃない？

そんな残念な事を考えていると、突然、

「シャー——————ッ!!!!」

「くぁwせdrftgyふじこlpぎゃあああああああ!!!!」

「!!!!!!!!!!」

ウサギのような何かは口から炎を吐きだし、それがギルベルトの右足にヒットした。

「あづー！あづー！死ぬ、あづッッッ！！」

そんな風にギルベルトがギャーギャー騒いでいる間に、ウサギ以下略はその場から逃げ出そうとした。

———その刹那。

「『パラサイト』！！」

バビュッ、という音とともに、風が実体化したような矢がウサギのような何かの左前足にヒット。

あまりにも突然の事だったので避ける事が出来なかったウサ以下略はモロに命中し、悲鳴をあげて蹲った。

ギルベルトは声の方に慌てて振り返ると、そこには弓を持ったフォンシエがいた。

「すまんすまん、もっと早く駆け付けるつもりだったんだが」

涙目のギルベルトを見て、フォンシエは苦笑いしながらそう言った。

「ったく、本当にそうだったーの！！：っーか、今のって下僕の技なのか？」

「おう。：一応麻痺してるとは思うけど、まだ止めを刺してないかな。戦闘方法を教えながらやっつけちまおう」

ニコリとフォンシエが笑うと、ギルベルトもつられて笑った。

「うっし、ぜってーブツ殺してやる…!!」

——黒い笑みだったが。

「ははは、怖い怖い」

そうフォンシエが思わず声を漏らす。

そうして、ギルベルトの初戦闘が幕を開けた。

Lv. 5 戦闘「とりあえずなぎ倒す!!」

「まず、戦闘について軽く説明するぜ」

「簡潔に纏めろよな下僕」

木刀とロングボウを構える2人の野郎と、見た目が愛玩動物な炎兎。なんだか文字にすると非常にシュールな光景だが、剣と魔法の世界だと許されるから不思議だよね!!

——何でこいつはいちいち上から目線なんだ……

と心の中でボソリと呟きながら、フォンシエは説明し始めた。

「まず、戦闘は殺し合いとか戦争とかと違って『魔力』を消費するんだ。さっきこのウサギ——ファビットが吐きだした炎は『魔力』を使って出たものだから、別に火傷する訳じゃない」

「へー、通りで傷跡が無い訳だ」

「そう。…ま、自分の魔力は攻撃したり攻撃を受けたりすると減るんだけどな」

「え、マジかよ。…つまり、HPとMPが一緒になってんのか。単純なようでめんどくせえな」

『HP』と『MP』という聞きなれない言葉に違和感を覚えつつも、フォンシエは話を続ける。

「ちなみに、戦争などでは『体力』を消費する。これは魔力とは違って最悪死んだりもするけど、魔力は尽きたら『戦闘不能』という表記が：何故だか知らんが頭上に出て、また何故だか知らんが近くにある宿屋に飛ばされるんだ。ちなみに戦闘不能の人間は攻撃できないぜ」

「っへー。俺前半の五文字しか聞いてヌエー」

「————ツツ、」

——こいつ殴りてえ……。

しみじみと思ったが、仕方なく耐える事にした。

「…ああ、そうそう。一応ただ剣振ったり弓射ったりするだけで魔力は消費されるんだが…、それよりも大量に魔力を消費するが、その分高い威力になる『術』・『技』もあるんだ」

「え、マジで?!」

何故か異様にテンションが高くなるギルベルト。

「…そうかあ。それなら俺様も鳳凰t n翔駆とか出来るのか…テンションあがるな」

「？」

フォンシエはさっきと同様に聞きなれない単語を聞いたためか、頭上にハテナマークをだした。

「まあ、そういうのは自然と習得されてたりするんだけどな」

「へー、つまり自然とレベルアップしてるのか…ファンタジー世界パネエ」

「まあ、よく分からないが気に入ってもらって何より」

フォンシエはにこりと微笑んだ。

——とその刹那、ファビットが痺れを切らして（説明を黙って聞くRPGのお約束的なモンスター）炎を吐きだしてきた。

フォンシエはギルベルトの腕を掴み、間一髪で避ける。

「つと、そろそろ麻痺も薄れてきたか」

フォンシエはそう言うのと、一本矢を取り出し、ファビットの足を狙い、射った。

足から少しずれたが、ファビットの胸に命中した。

「さて、そろそろやるか！」

「おう！」

ギルベルトは意気揚々と木刀を構え、ファビットの方へダッシュ。ファビットの首元を狙い、一気に木刀を突く。

ファビットは避けようとしたが、あまりのスピードに避けきれず、

モロに木刀が当たり、「キャン!!」という悲鳴をあげて転がり、民家の壁に衝突した。

「…お前、前に剣持って戦った事あんのか？」

思わずそう訊いてしまう程、ギルベルトの動きは機敏だった。

「は?…いや、特にねーけど」

不思議そうな顔をして答えるギルベルト。

フォンシエは天才って本当にいるのかと少し感動した。

「そういや、俺も技とか使ってみてーんだけど。さっきのお前みたいに」

ギルベルトはキラキラと瞳を輝かせながらフォンシエにそう言った。「そうだな。まあ、上手くいくかどうかはお前の腕次第なんだが…まあいいだろう。——瞼を閉じてくれ」

フォンシエがそう言うのと、ギルベルトはゆっくりと瞼を閉じた。

「そして、そのまま剣先に意識を集中させるんだ。上手くいけば技がぼんつと浮かんできて、発動させる事が出来る」

ギルベルトは言われた通りに剣先（木刀）に意識を集中させる。

——ッッ!!

頭が突然かき混ぜられたような変な感覚になる。

ギルベルトは剣を握る手の力を強くさせ、なんとかそれに耐える。

そして。

——思い浮かんだ!!

ギルベルトはぱあっと顔を明るくし、技名を思い切り叫んだ。

「『業火剣』！！」

突然剣（木刀）が炎に包まれ、その勢いでファビットを思い切り斬る。

…ぶっちゃけ属性的にはあまり意味が無いような気がするのだが、そこは置いておいて。

だが、そんな弱点をカバーする程の威力でファビットを斬ったのと、前の攻撃で魔力を消費していたのとでファビットは戦闘不能となり、目の前から姿を消した。

「いやった、俺様が倒したああああっ！！！！」

ギルベルトは木刀を空に掲げ、最高の笑顔になった。

Lv. 6 説明「ようこそ」「イティニム むら」へ!! ▼」

「よかったな、無事成功して」

フォンシエはにこりと微笑む。

一方、ギルベルトは子供のように無邪気にはしゃいでいた。

「ははー、褒めた後に馬鹿みたいに称えやがれ下僕ー!!」

「そう言わなければせめて褒めるぐらいする気になるんだがなあ…」
そう言いつつ、フォンシエは少し褒めてやったのであった。

「そーいや、建物とかは傷ついてないのな」

辺りを見まわしながら、ギルベルトがそう呟いた。

「まあ、一応消費してるのは『魔力』だからな。魔力は自然のエネ
ルギーみたいのを利用してるらしいから、建物に当たったりして壊
れたとしてもすぐに…何故だか知らんが修理されるらしい。勝手に」

「自然パネエ!!」

「…本当だよなあ」

ギルベルトがぎゃーぎゃー騒いでるのを見て、フォンシエはクスリ
と笑った。

「……あー、何年振りかにはしゃいだから疲れた」

「残念な感じが漂いまくってるんですけど」

ギルベルトはさっきとは一変しまくりな、超絶不機嫌顔となった。

「しゃーねえだろ、人生なんて楽しくねえんだから」

「まだお前若いよな?! まだ若いよな?!」

「17なんてその内死ぬ程度だろ」

「21の俺に謝ってくれ!!! : まあ、俺も年寄りって訳じゃねえけど」

戻ったせいかな疲労が…と、フォンシエは心の片隅でそう思った。



気だるげな異世界人を引っ張りながら歩いていると、平原への入り口付近にいかにも村人 A（おっさん）といった感じの人間が立っていた。

「んだ、あいっ」

ギルベルトが目を細めながらそう言うと、フォンシエはさらりと

「ああ、あれはこの村——イティニム村について説明する……というか必ずどんな場所にも存在する伝説の男、【説明神】さ」「f m d k l d z x c m、n h j f s、.. z n d、g t フグツツツツツ」ギルベルトは思い切り吹きだす。

フォンシエはギルベルトが吹きだした理由が分からなかったがとりあえず苦笑いした。

「いや、今のところが面白かったんだ？」

「面白かったとかそういう次元じゃねーよこれ!!」

「…もしかして、お前の世界には説明神はいないのか?!」
「いてほしくねーよこんなの!!」

フォンシエは驚愕のあまり、持っていたロングボウを地面に落した。

「ま、まさか……そんな事があつて……」

フォンシエが暫く口をあんぐりと開けて硬直したままになったので、

ギルベルトは見なかったことにして、説明神とやらの話しかけてみることにした。

「おい、そのお前」

『ようこそ 【イティニム むら】へ!!! ▼

ここは きみの たびだちの むら! ▼

ゆうきを だして ここから とびだせば ▼

きつと きみの でんせつは せかいに ひろがる はずだ! ▼』

「……………」

——コメントしようがねえ…………

思わず思い切り説明神を睨みつけてしまったギルベルトは、慌てて
少しだけ表情を柔らかく（とはいっても恐ろしいのに変わりはない
が）した。

「あのS『ようこそ 【イティニム村】へ!!! ▼

ここは きみの たびだちの むら! ▼

ゆうきを だして ここから とびだせば ▼

きつと きみ「同じ台詞しか言わねえんかよk S!!!」

相手するのが面倒になったので、ギルベルトはフォンシエを叩き起
して平原へと向かっていった。

Lv. 7 夢想「不思議ちゃん系な旅人さん」

「そーいやー、何処行くんだ？」

ギルベルトは木刀をいじりながらそう言う。

「ああ、そーいや言ってなかったっけか。…ここから暫く東の方向に向かって歩いていくと、この国———イストで二番目に有名な【シアオン】という街だ。平民からお貴族様までいる、大分賑やかな街なんだぜ」

まあ、行った事は数回ぐらいしかないんだけどな、と言って照れ隠しに笑ったりしながらも、フォンシエは嬉しそうに話した。

ギルベルトは自分とは真反対のまっすぐしたその姿勢に眩しさを感じた。

「…どうしてそんなに嬉しそうなんだか」

ギルベルトは微かな声でそう呟いた。

フォンシエは、何か言っていたことには気付いたが、あまりにも微かな声だったために、自慢も耳でも聞き取ることが出来なかった。



「『時は儚く 美しく そして 何よりも残酷で
ボクを優しく そして冷たく そわり そわりと 包み込む———』」

しっとりとしたバラードを、透き通った声がしんみりと音を紡ぐ。
その声の主は、一風変わった風貌の青年だった。

小麦色したショートカットの髪だが、もみあげは少し長めで、色は赤紫であった。瞳の色は澄んだ青色で、緑のメルヘンチックなジャケットを羽織っており、第一印象が『変人』そのものだった。
どうやら、右目の辺りに大きな傷を負っているようだが、遠くから見ると、そのようなメイクにしか見えない。

2人が歩いている途中に歌声が聴こえてきたので試しに近づいてみたら、不思議な風貌の青年（道化師か何かにしか見えない）を発見したのである。

怪しさを異様に放っているが、とりあえずギルベルトが話しかけてみることにした。

「おい、その変な奴」

初対面の人間に言うのはどうかと思う台詞でその青年に話しかけるギルベルト。

対して、青年はくるりとこちらの方を振り向き、さっきの台詞など全然気にしていないというような気の抜ける笑顔をしていた。

「ははは、初対面の人間にいきなり変な奴かあ。まあ、ボクはさほど気にしていないし気にする必要もないから怒らないでおくけど」

———そうか、見た目通りこいつも変人なのか…
フォンシエは残念な気持ちで広がりこんぐった。

「ああ、そうだそうだ。やっぱり初めましてコンニチハな人には自己紹介が必要だよねえ」

青年はにこりと微笑む。

そんな青年を見て、2人は反応に困っていた。

「ボクの名前はトロイ・メライ。さて問題！『トロイメライ』とはどういう意味でしょうじゃかん！正解はドイツ語で夢想曲！！……ああ、ドイツってどこ？とか聞かないでね面倒くさいから！んでー、ちなみに意味はロマンティックな、器楽用の小曲なんだよー。

——ふふっ、まるでボクみたいだ」

一方的に語りだした青年——トロイ・メライは、ドン引きしている2人の青年をさほど気にしていない様子で語りだした。

「ボクは世界中を旅する旅人さ。……ところで、旅人って響き、なかなか素敵だと思わないかい？音楽的だよねえ。ボクは好きだなあ。そうそう、ボクは歌う事が好きなんだ。楽器を弾いたり吹いたりするのも好きなんだけどさ。でも声で表現する方が楽しいんだ！！……そういうや名前は？」

——普通逆だろ！！

と、二人とも心の中でそうツツコミをいれたが、無駄のような気がするので止めることにした。

「俺様はギルベルト・H・アイヒベルガー。気軽にギルベルト様とでも呼べ」

「それ気軽でもなんでも無いんですがねえ……。まあいいか。俺はフオンシエ・コンテステイ。ついさっき旅を始めたばかりなんだ」

軽くそう自己紹介をすると、トロイは嬉しそうに笑った。

「君達も旅するんだね！素敵の旅になるといいねえ」

——それが、不思議系旅人、トロイ・メライとの出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3725y/>

勇者→魔王＝＼（＾o＾）／

2011年11月19日21時07分発行